

マタイ 6:9-13 「御国が来ますように」

「だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が行なわれますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください』」

「神の国が来ますように」 毎日そう祈りなさい、とイエス様は教えてくれました。「神の国が来ますように」 わたしたちはイエス様から教えられたとおり毎日祈るのであります。神の国が来ますように！

さてこの、神の国が来ますように、とわたしたちが祈る、この祈りはどういう祈りなのであろうか。それは何を意味し、それは何をもちたすんだらうか。わたしたちは今年、自分が祈っていること、自分が毎日祈っていることの中味をしっかりと自覚もし把握もした上で、神の国が来ますように、と祈りたいのであります。

そこでまず、神の国の意味であります。わたしたちが今日読みましたマタイ伝第6章10節では「御国が来ますように」というふうに、神の国というのが「御国」となっている。御国とは聖書の原語におきましては、ただ一人の王が統べ治めたもうところの領域、という意味であります。

ただ一人の王が統べ治めたもうところの領域、これが御国であるという。ただ一人の王が統べ治めたもうところの領域。それでは、王とは誰か？ 誰が王であるのか？ 統べ治め支配したもうところの王とは、いったいだれであるか、ということでもあります。

犬をペットに飼っているひとの話を聞きますと、犬というのは原始時代にはオオカミと同類だったのであって、オオカミのごとく森の中で群れを作って生活していた動物である。群れを作って生活するということはつまりリーダーがいて、そのリーダーの統率に服従して生きていたということである。で、オオカ

ミだった頃の記憶がどうも犬には残ってるらしい。それで犬というのは、自分を飼っているところの家のリーダーが誰であるかということを見抜く力を持っているんだそうである。そいでもって、この家のほんとうの支配者はお母さんだということを見抜きますと、その犬はいったいお母さんの言うことしか聞かない。もうお父さんが何を言ったところで、知らんふりして聞く耳を持たないという。ほんとうは誰が支配者なのかということを見抜くんであります。

わたしたちをふりかえって見るならば、わたしという人間の生活、わたしという者の人生を、ほんとうに支配しているところのものは何なんだろうか、ということでもあります。そこを見なければならぬ。

いや、わたしは神様を信じてクリスチャンとして生きているんです、というのがわたしたちの建前でありますけれども、建前ではなく、ほんとうのところ、この自分の人生をほんとうに支配しているところのものは、何であるのかという、そこを見なければなりません。で、結局のところ、自分の人生を支配しつぎ動かしているのは、自分の頑固な自我である、自分の欲深い心である、自分のつまらないメンツである、ということが往々にしてあるわけです。

ですから、今日マタイ伝 6:9 で言われていますように、わたしたちがまず祈るべきは「御名が崇められますように」ということでなければなりません。わたしたちが第一に掲げるべきものはなんだろうか。わたしたちが第一に立てるべきものはなんだろうか。わたしたちが第一に置くべきものはなんだろうか。「御名が崇められますように」ということであります。わたしたちは、自分というものを脇へ置いて、主イエスキリストの父なる神様を第一にするのでなければなりません。

さてこの、自分というものを脇へ置く。自分の頑固な自我というものを脇へ置く。自分の欲深い心というものを脇へ置く。自分のつまらないメンツというものを脇へ置く。そのようにして、万事につけ神第一にすることができたら、これはもう万々歳でありまして、わたしたちがそういうふうになれるんだったら、もうすぐにでも天国へお呼びがかかって、わたしたちはこの地上から取り去られてしまうであらう。

それがなかなか、そう簡単にはならないというのが、わたしたちであります。もちろんわたしたちは「御名があがめられますように」と祈ります。毎日祈ります。人生において第一番目に來るのが、わたしではなく神様となりますように、わたしの人生の万事一切を、わたしではなく神様がご支配くださいますように、というのが真剣なわたしたちの祈りであります。そうであっても、自分というものを脇へ置くことが、なかなかむずかしい。頑固な自我というものを脱ぎ捨てるのが、なかなかむずかしい。欲深い心から離れるということが、なかなか難しい。つまらないメンツというものを簡単に捨てるということが、なかなか難しい。

そこで、わたしたちは、「御国が來ますように」と祈らなくてはならないこととなります。どうか、まことの神様が主イエスキリストにおいて、王の王、主の主として、わたしのところへおいでくださいますように。主イエスさまが、王の王、主の主として、わたしをご支配くださり、わたしの一切を治めてくださいますように。そのようにして、わたしという一個の存在が、王の王、主の主イエスキリストの治めたもう領域となりますように。そういう祈りが、「御国が來ますように」という祈りの意味する内容であります。

いまここに、自分と言う存在が、一個の国であるといふふうに考えたらよいかもしれない。わたしたちが生きているこの日本国の歴史をひるがえしてみるならば、昔は徳川幕府が 250 年間支配していたんだけど、いよいよ国が立ち行かなくなったというときに、最後の将軍、徳川慶喜公が大政奉還をいたしました。国を治めるところの政治というものを、みかどに全部お返ししたわけです。だが大政奉還したからといって、一晩のうちに日本国の全部がみかどの治めたもう領域になった、というわけでは全然なかった。大政奉還しましたあと、かなりしばらくしまして官軍が西から東へ上ってまいりまして、いよいよ江戸城に入ることになった。入るにあたっては、その前に西郷隆盛と勝海舟が直談判をいたしまして、これで江戸無血開城ということになった。官軍は戦をしないで肅々と江戸城に入るといふ、これは城を明け渡したんだから、降伏した、ということでありまして。だが官軍が江戸に入った後、幕府の一部は上野山に立てこもって官軍と戦った。上野戦争であります。こないだ上野で救世軍の

初野戦をしましたけれども、あそこが上野山です。上野山に幕府の残党が陣取りまして、官軍は不忍池の向こうに陣取ってカノン砲をガンガン打ち込んだ。池の上を砲弾が行き交ったわけですが、救世軍が毎年初野戦をするあの場所、ちょうどあの場所が官軍が総突撃をした場所でありまして、激戦の末、上野山は陥落いたしました。だが、上野山が落ちててもまだ、日本国が全部みかどのものとなった、というわけではなかった。その後、奥羽戦争を戦わなければならなかったし、函館戦争を戦わなければならなかった。函館の五稜郭が落ちまして、これで全部みかどが治めたもう領域となったというわけであります。

さて、ひとつの国でこういうことがあったわけですが、主イエスキリストとわたしたちとの関係におきまして、ずいぶん似たようなところがあるのではありませんか。

すなわち、わたしたちは自分の罪というものが本心からわかって、恵の座にぬかずいて、悔い改めの祈りをしたお互いであります。そうして、「イエス様、わたしの人生の主導権をイエス様にお返しいたします」というふうなお祈りをしたわたしたちであります。これはまさに、人生の大政奉還とでも言うべきことでありましょう。だが、恵の座にぬかずいて、たった一晩で、わたしという一個の存在の全部が全部、イエス様のご支配したもう領域になるかということ、そういうわけではない。

わたしたちは、単に悔い改める、単に人生をイエス様におささげする、というだけでない。わたしたちは、自分の心というものを、まったくイエス様に明け渡すのでなければなりません。アビラの聖テレジアというカトリックの聖女は、人間の心の中には城があって、その城をイエス様に明け渡さなければならないんだ、ということを『靈魂の城』という本で述べております。これはまさに、靈魂の江戸無血開城とでも言うべきことでありまして、王の王、主の主であるイエス様に対して、わたしたちの心の城をまったく譲りわたさなければなりません。

注意すべきは、わが心をイエス様に明け渡さんきゃならんというとき、そこに少なからず葛藤がある、ということであります。ちょうど江戸開城した後だっ

て上野山の戦いがあったように、わたしたちも、イエス様にまったく心をおさ
さげしようと思っても、いかんせん、それが出来ない部分が、ところどころ残
ってしまう。それらについては、非常な葛藤、非常な戦いを、経験しなければ
ならないということがあります。最後に残った頑固な自我、最後に残った欲深
い心、最後に残ったメンツ。まさに靈魂の上野山における幕府の残党とでも言
うべきものが、わたしたちのうちに残っているのです。

この戦いにおいてわたしたちがなすべきことは、何であるか。イエス様に対し
てひたすら白旗を上げ続けるということが、わたしたちのなすべきことであり
まして、それが今日マタイ伝第 6 章 10 節で言われております、「御心が行なわ
れますように」ということであります。「神様、どうか、わたしの思いを取り下
げますので、神様、あなたのお心をわたしに行なってください」という、それ
が白旗を掲げるの祈りであります。

救世軍歌に「わが主にすべてをささげまつりて」という歌がありまして、その
折り返しに「みなささぐ、みなささぐ、わが主よみまえに、みなささぐ」と歌
われております。これが英語の原文では、アイ・サレンダー・オールとなっ
ておりまして、直訳しますならば、全面降伏します、無条件降伏します、とい
うことであります。わたしたちは靈魂の戦いというものを経験することがある。
わたしはこうしたいんだという、わたしの思いというものがある。ところが、
どうも神様はそうでないらしい。神様はわたしの思いとは別のところへ導こう
としていたもう。それがわかってまいりますと、自分の思いと、神様のお心と
が、ぶつかりまして、大変な葛藤を経験いたします。そこでわたしたちが祈ら
なきゃならないことは、アイ・サレンダー・オール、全面降伏します、無条件
降伏します、どうか神様のお心が行なわれますように、という祈りであります。

さて、江戸無血開城がなり、上野山が落ちましても、なお奥羽戦争、函館戦争
というものを経なければなりません。わたしたちも、ずいぶんこれと似
たところがございます。わたしたちは、神様にまったく降伏して、それによっ
て、まったく聖潔の経験をいたしますけれども、聖められたからといって、そ
の後ぜんぜん葛藤がなくなるかというと、そうではない。松田鉄平大佐補とい
う方が昔おられて、もう天国に行かれましたけれども、松田鉄平大佐補がある

年の暮れに入院なさって、お正月には元気になって退院し、新年の集会で証しをなすったことがあった。わたしは病院に入院して、自分がまったく罪人であるということがわかったので、ベッドの上で徹底的に悔い改めをいたしました、ハレルヤ！という証しでありました。それから間もなくして松田鉄平大佐補は天国に召されたんですけれども、思えばあれが霊魂における最後の戦い、言わば霊魂の函館戦争とでも言うべき経験だったのではなかろうか。神様に最後の最後まで明け渡していなかったところの、その最後のところ、霊魂の五稜郭とでも言うべき場所を、いよいよすっかり明け渡してしまったので、聖潔の経験が完成せられて、上へ、天国へと召されたんではなかろうか、と考える次第です。

さて神の国とは、どこか遠くにあるものではありません。わたしたちは、どこへも行く必要がありません。わたしたちがいるべき場所は、いま、ここにあります。ひたすら、いま、ここにあります。わたしたちは、いま、ここに、この地点に、生きているのでありまして、どこかへ移動する必要はありません。

しかし重要な問題は、誰がここを支配しているか、という、ただこの一点であります。

もし主イエスキリストが、王の王、主の主として支配していたものであれば、ここが、この場所が、神の国であります。もし主イエスキリストが、わたしたちの心を支配していたものであれば、わたしたちの心が、神の国であります。もし主イエスキリストが、わたしたちのからだを支配していたものであれば、わたしたちのからだ、神の国であります。もし主イエスキリストが、わたしたちの家庭を支配していたものであれば、わたしたちの家庭が、神の国であります。

そうして、神の国が到来する唯一の秘訣は、白旗を上げることです。われわれがイエス様に対して降伏する、ということになります。わたしではなく、イエス様の御名が崇められますように。わたしではなく、イエス様がご支配くださいますように。わたしの思いではなく、イエス様のお心が行なわれますように。これを祈ることが、神の国到来の唯一の秘訣であります。

どうか今年、われわれは、いつも、つねに、たえず、どこにあっても、神の国の中に生き、神の国の中で呼吸し、神の国の恵み味わい、神の国の民として生きることができますように！ 祈りましょう。

祈り

主イエス様。あなたがお教えくださったように、あなたがお教えくださったとおりに、わたしたちは祈ります。

天におられるわたしたちの父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。御心が行なわれますように、天におけるように地の上にも。わたしたちに必要な糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。国と力と栄えとは、とこしえにあなたのものです。アーメン